

## 評釈ディキンソンの手紙(1) : 批評家ヒギンソンへの手紙

原口, 遼

<https://doi.org/10.15017/2559326>

---

出版情報 : 文學研究. 96, pp.15-53, 1999-03-30. 九州大学文学部  
バージョン :  
権利関係 :

# 評釈 ディキンスンの手紙 (1)

## — 批評家ヒギンスンへの手紙

原 口 遼

Should you think it breathed -

(ヒギンスンへの最初の手紙、1862年4月15日)

Deity - does He live now?

My friend - does he breathe?

(ヒギンスンへの最後の手紙、1886年5月、死の1週間前)

### 目 次

1. 本論の意図	16
2. ヒギンスンへの手紙 (▼印はヒギンスンからの手紙)	
L260 62.4.15 お忙しいでしょうが、教えてください。	17
4.17 ▼ 編集者への手紙	20
L261 4.25 枕元からご返事さしあげます。御手術有り難う存じました。	20
L265 6.7 あなたのお手紙で酔いはしませんでした。	26
L268 7 写真はないのです。私は小さなミソサザイです。	29
L271 8 ブラウニング夫人像お持ちですか。	33
L290 64.6 戦争での御負傷存じませんでした。眼の手術で 医者に掛りました。	35
L314 66.1 愛犬カルロが亡くなりました。	
L316 初 ポストン行きは不安です。当地アマーストで会って 頂けますまいか。	36
L319 6.9 ポストン行きには父が反対。当地で会ってください。	39
L330 a 69.5.11 ▼ 友よ、あなたの手紙をときどき読んでおります。	40
L330 69.6 手紙は精神だけなので不滅です。	
L342 70.8.16 家に居ります。喜んでおります。	42
L342 a 8.16 ▼ 妻への手紙。彼女の言ったことを記しておこう。	43
L342 b 8.17 ▼ 妻への手紙。父君に会った。四角四面の人だった。	46
L418 74.7 父の最後の日、一緒に居たいと思いました。	50

3. 付 録

ヒギンソンのディキンソン邸訪問の日程表 (1870年 8月) ..... 51  
以後のヒギンソンへの手紙 (要点のみ) .....

4. Selected Bibliography ..... 52

### 本論の意図

Emily Dickinson (1830-1886) の詩は定本とされている Johnson 版 (3 巻本1955刊) によると1775編が知られている。折々の手紙の類に差し挟まれた、必ずしも完全な詩形をなしていないものも含めると、その総数は優に2000編を越えると思われるが、それらの詩は全般に難解である。邦訳にしてもディキンソン詩の全部が翻訳されているわけではない。恐らく3分の2の1200編ぐらいまでは、意味内容の論理を通しながら翻訳できるのではないかとと思われるが、それから先の翻訳は誤訳との戦い、つまり誤訳をしないでどこまで訳せるのかの苦闘が要求されて、翻訳者側からみると胸付八丁というところであろう。これは、単に翻訳だけの問題ではなく、専門の英語・英文学を専攻した日本人においてですら、明快に把握できる者は数少ないようである。いうなれば英語を母国語とする一般の者たちの99%が十分に理解できない詩が数多く残っていることになり、それらがそれなりに意味上の consistency を持って、横たわっているのであるから、研究者を悩ませているわけである。

そうした難解な詩を理解するのに、恐らく一番役立つのは、彼女の物の考え方、彼女の主張、家族・友人関係が分かる、その手紙を丁寧に読むことであろう。

ディキンソンは、俗に「隠遁の詩人」と言われるが、実際に30歳を越えた頃からは、眼疾でボストンの医者に掛かるため、暫くアマーストの町を後にしていた時期を除いては、広い屋敷の中に籠って (「広いので徒歩旅行ができるくらい」手紙 L736参照)、外界の人たちとの交際を絶っていたようである。しかし、逆に、彼女は外界の人たちと夥しく手紙を通して交流をしていて、その手紙たるや Johnson 版の3巻本によると1049通を数える。従って、手紙は彼女

の詩を読む場合の貴重な脚注として役立つのであるが、困ったことにこれが彼女の詩と同様、難解なのである。そこで、ディキンソン語を理解するのに必須の手紙をまずは翻訳してみて、それに評釈を加えることで、今後のディキンソン詩の理解に資することが本稿の目的となる。

### ヒギンソンへの手紙——翻訳と評釈

[L 260, 1862年 4月15日（Lは Letter の略。それに続く番号は書簡集（Johanson 版）の通し番号）]

ヒギンソン様、

御多忙のことと存じます。が、私の詩が「生きている」かどうか一言頂けませんかでしょうか。

心がそれ自身の近くにあり過ぎて、はっきりと見分けられないのです。それに私は尋ねる方とて持っておりません。

同封致しました詩は「息づいて」おりますでしょうか。もしお伝えくださるお暇がございましたら、私、たちまち感謝の気持ちで一杯となりましょう。

私がもしや間違った詩を書いていて、それを教えてくださったら、心からあなた様に対して名誉を感じます。

名前を記したカードを同封致しました。お尋ね致します。先生、何が「真実」なのか教えてください。

言わずもがなですが、必ずや私のお願いにお応えくださいますね。

なぜなら、名誉を質に入れましたのですから。

[評釈：L 260] この手紙が書かれたきっかけとその後の経緯については、書簡集の編者ジョンソンが次のように記している。

このヒギンソンへの最初の手紙は、彼女が *Atlantic Monthly* 誌の4月号の中に、将来作家を志す者たちへ実際的な助言を与えた「若い寄稿者へ」



という巻頭の文章を読んで書かれたわけだが、この後、二人の手紙のやりとりはディキンソンの死の間際まで続いた。ディキンソンはこの手紙に添えて4編の詩を同封したが、それらは“Safe in their Allbaster Chambers,” “The nearest Dream recedes unrealized,” “We play at Past”と “I’ll tell you how the Sun rose.”であった。

ジョンソンはさらに「エミリ・ディキンソンは自分のサインの代わりに、カードに自分の名を記し、それを小振りの封筒に入れ、それを手紙に添えて同封していた」と記している。

文学史的に、後代から眺めてみると、偶然ながら、しかも貴重なる事件が稀に起こっていることが分かる場合がある。それらは、例えば、メルヴィルのホーソンとの面会（1853年夏）とか、エマソンのハーバード神学校での神学校批判の講演（“The Divinity School Address,” 1837年夏）、ヘンリー・ソローがメキシコ戦争に反対して人頭税を払わず、一夜留置場に入れられた事件（1846年夏）、あるいはヘミングウェイのイタリア戦線での臼砲による重傷と病院送り（1917年夏）等である。そして、このディキンソンが批評家ヒギンソンへ最初の手紙を送った1862年4月15日も、アメリカ文学史上極めて重要な日となった。なぜなら、それは後年、Whitmanと並ぶアメリカ二大詩人と見なされるようになったディキンソンが、生涯を通じての詩の指南役となったヒギンソンとの、何気ない始まりながら、極めて重要な関係を造り上げた日であったからである。

さて、この手紙の特徴であるが、まず実に短い短信であるということがある。さらには、なぜ手紙を書き送るのかについての前口上と自己紹介が欠けているということがある。

次に、文章の調子は、相手を持ち上げ、自らをへりくだりつつ、教えを請うている調子であることである。そして、私には尋ねる方がいないので、あなたにすがるのであるといった、助けを求める感じ、あるいは孤独な感じが出ている。それは、当時女性の権利を唱道していた女権拡張論者で、進歩的評論家ヒ

ギンソンの精神を一方でおだて、他方で彼の父性愛に訴える種類の文章であった。

第3に、何かしら訳が分からないが、シェイクスピアへの言及を思わせる文章で締めくくられていることである。(終わりの一文の“My honor is its own pawn.”は「私の名誉が質(pawn)にはいつている、或いは名誉そのものが将棋の歩(pawn)である」を意味し、ご返事が頂けるかどうかにか差出人の名誉がかかっていると、まなじりを決したような、また妙に自信があるような手紙の結び方である。

第4に、それぞれに関連がなさそうなテーマと形式とで書かれた、これまたなにやら訳が分からないような詩が4編同封されていて、それに添削を求めている感じであることである。

第5に、手紙には通常のサインがなく、その代わり別の封筒がはっていて、そこには彼女の名前が書かれたカードが入っていたことである。サインの付された手紙なら、手紙読了後、そのまま屑籠に直行となるところが、名刺代わりのカードが入れられており、添削用見本として稚拙そうな(つまり一見間違いだらけのような)詩が4編同封されていた。これでは文芸評論家で、ややお人善しの感じのヒギンソンは、思わず知らず大胆かつ徹底的に添削して送り返したものと思われる。

つまり、この手紙、表面的には innocence を装いつつ、実は、相手の返事の調子までもコントロールし、こちらのペースで事を進めようとした狡猾な手紙と見ることが可能である。

結びの「名誉が質に入っている」とは分かり難い句であるが、Richard Sewall<sup>1</sup>などによると、シェイクスピアへの言及ではないかとされている。或いは、チェスにおける王・女王・騎士たちの先兵として、「名誉」そのものが傷つく覚悟で打って出るというのであるから、(フェミニストの名声の高いあなた様のことですから、よもやそうした者の気持ちを傷つけられることはありませんまい)、必ずご返事お待ちしておりますといった調子の文章になっていると思われる。恐らく、受け取ったヒギンソンは、訝しく思いつつも、思いつ切り

厳しい詩の添削とコメントをして、ディキンソンに返信を送り返したものと思われる。それで、ディキンソンは大いに傷ついた振りをして、さらに関係を深めて行くということになる。

これがディキンソン詩を歴史の闇から救った、批評家ヒギンソンへのディキンソンへの手紙を通しての最初のアプローチであったのである。

.....

註(1) Sewallはこの“pawm”に関して、Shakespeareから*Two Gentlemen of Verona*, *Richard II*, *2 Henry IV*, *Cymbeline*等を引用している。  
Cf. Richard Sewall, *The Life of Emily Dickinson*, 541.

#### [▼ヒギンソンから編集者への手紙、1862年4月17日]

(*Atlantic Monthly* 誌の編集者 James Fields への手紙の追伸)

僕は「若い寄稿者への手紙」によって、僕のところにこれまで以上に詰まらぬ作物が送られて来るのじゃないかと予測している。そのような詩の詰まらぬ例が、昨日、一昨日と送られて来たよ。尤も幸いなことに、出版するような代物ではないのでそっちには送らなかったがね。(Jay Leyda, 55)

#### [L 261, 1862年4月25日]

ヒギンソン様、

あなた様のご親切にはもっと早く感謝すべきところでした。でも私、病気でした。<sup>1</sup>それで今日は寝ながら書いています。

外科手術<sup>2</sup>、大層有り難う存じました。予想したより苦痛はありませんでした。お言葉に甘えまして、もう少し詩をお送り致します。変わりばえとてありませんが。

私の考えが衣をつけていないとき、はっきりと理解できたかのように思いますが、それに衣装を着けてやった途端、どれもこれも似たり寄ったりになり、痺れてしまいます。

私の年齢のことお尋ねでしたでしょうか。<sup>3</sup>私、詩は書いたことがないのです。この冬まで、せいぜい一つ二つ程度です<sup>4</sup>、先生。

私はこの9月以来、恐怖を感じています。<sup>5</sup> 誰にも言うことができません。それで、私は、墓場の近くで勇気づけのために歌を歌う少年のようにして歌ってみるのです。だって恐いのですから。私の読書のことについてお尋ねでしたね。詩人としてはキーツを持っています。ブラウニング夫妻<sup>6</sup>です。それから文章はラスキンさんです。トマス・ブラウン卿、それに「黙示録」です。私、学校教育を受けました。でも、あなた様の言い方によりますと、無教育ということになりますね。<sup>7</sup> 少女時代、私は友達を持っていましたが、その人は私に不滅性ということを教えてくださいました。でも、その人自身、不滅性に近づきすぎて、帰らぬ人となってしまわれました。<sup>8</sup> その教師役の方が亡くなると、7、8年は、辞書だけが私の友達でした。<sup>9</sup> それから、私はもう1人に出会いました。しかし、その方は私が彼の弟子であることに不満足で、それで国を離れられてしまいました。<sup>10</sup>

私の友達についてお尋ねでしたね。それは丘です、先生。それと夕日、そして犬。<sup>11</sup> 父が私に買ってくれた私と同じぐらいの大きい犬です。それらは、人間たちよりも素晴らしいです。というのも、彼らは知りながら沈黙してくれているからです。それに、真昼時の水たまりの音は、私のピアノよりも素晴らしい音楽です。<sup>12</sup> 私には兄と妹があります。母は考えることなどとは無縁です。父の方は書類鞆を抱えて忙しく、私たちが何をしているかご存じありません。父は私にたくさんの本を買ってくれます。でも、あまり読むなといえます。<sup>13</sup> それらが、私の心を弄ぶのが嫌なのでしょう。みんな宗教心は篤いです。私は別です。そして、毎朝「父」と称する日蝕に対して、お祈りを唱えています。でも、きっと私の話は退屈なことをございましょう。<sup>14</sup> 私は学びたいのです。どのようにしたら、成長できるのか教えてくださいませんか。それとも、それはメロディのように、教えることはできないのでしょうか。魔女の術のように。

ホイットマンさんについて言っておられましたね。<sup>15</sup>私、その方の本は読んだことがありません。でも、何だか下品だと聞いたことがあります。

私は、プレスコットさんの「状況」<sup>16</sup>を読みました。でも、それが暗闇でも私につきまとうものですから、それで読まないようにしております。

この冬、新聞社から二人の編集担当の方が、父のところにお見えになって、私に私の考えを表現するように言われました。<sup>17</sup>「なぜですか」と私が尋ねますと、その方々は、私が出し惜しみしていると言われました。それを世の中のためにも、使ってみたらとおっしゃいました。

私は自分のことを値踏みできません。私自身のことは。

私の大きさは私にとって小さく感じられます。私はあなたの『アトランティック・マンズリー』の巻頭の文章を読みました。<sup>18</sup>そしてお手紙を頂いて、あなた様に対して面目が立ちました。私の打ち明けたお尋ね事を見捨てたりされないと、確信しておりました。

先生、これであなた様のお尋ねに答えたことになりましょうか。

あなたの友人

E. ディキンソン

【評釈：L261】この手紙にはかなりの註が必要なので、次にそれを記しつつコメントを加えることにする。

1. 「私は病気だった」とは、恐らくヒギンソンの返事が余りに素気なく、また詩の添削が思いのほか徹底的であったため衝撃を受け、それで寝込んでしまったという意味にも取れる。勿論風邪などであったのかも知れないが、少なくとも、相手にちょっとやりすぎたかなと後悔を誘うような文章である。考え方によっては、相手に次なる詩の添削をお願いし、今度は自信作を潜ませておき、甘い点をつけて貰う筆致であると受け取ることができる。男女の心理の綾について知悉した試合巧者であり、コケットリーとも取れる。
2. 「外科手術」とは勿論詩の添削のこと。彼女にとって、詩を添削されるこ

とは文字通り身をも削られる体験で、彼女が詩作のことをこの上もなく真剣に考えていることを示している。

3. 「年齢のことをお尋ねでしたか？」とその話題に触れつつも、いきなり話題を転じて、私は詩作を1、2した程度にしか過ぎないと述べている。これなどずっとぼけであって、少女を装ってはいるが、実は32歳の老練な女性であるわけで、うぶなのか相手を翻弄しているのか、コケットリーなのか、分からないのが、技巧の極みである。
4. 「この冬までせいぜい1、2の詩作をした」については、編年体でディキンソンの詩が編まれたジョンソン版などを点検すると、すでに300編程度の詩を書き、それらの詩を保存し始めており、彼女が本腰を入れて詩人たろうと決意していたことが判明する。ここもわざと素人臭く匂わせている箇所。
5. 「この9月以来の恐怖」とは、前年の9月以来の意味であるが、恐らく、彼女の眼疾が進み手術が必要となり失明するかも知れないので、その恐怖におののいているという意味ではないだろうか。他の可能性としては、当時の心の恋人であったフィラデルフィアの牧師 Wadsworth 師が、当時としては異域であったサンフランシスコの教会に赴任することが判明して、心の抛り所を失うことを恐怖しているということが考えられる。またこれは、何かしら重要なことを打ち明けるようであって、実は隠して気を引くやり方で、その真意は、自分の精神の抛り所になってほしい——自分を救ってほしい（後年、ディキンソンは、あなたは私を「救った」と2、3度ヒギンソンに伝えている）——ということであろう。

私見によると、ディキンソンは、生涯頼りにしていた男性が二人いた。その一人は岩のごとく厳めしく寡黙な父の Edward であり、もう一人が元ユニタリアン派の牧師出身の批評家ヒギンソンであった。後年、彼女が亡くなったとき、（ディキンソンの父は死んで久しかった）彼女の埋葬に訪れたのが、この批評家ヒギンソンであって、彼は、彼女の埋葬に当たってお祈りの代わりに、Emily Brontë からの一節を読んだと言われる。ヒギンソンは評論家・

政治家・反奴隷主義論者・南北戦争の大佐・女権論者でもあったが、何よりも彼はハーヴァード神学校を卒業した Unitarian の牧師であった。

6. 「ブラウニング夫妻」については、これからも度々の言及がある。ディキンソンの尊敬していた文人たちは、イギリスのブラウニング夫人、批評家と同棲していた George Eliot、エミリ・ブロンテなどの激しく世の中に反抗しつつ生きた女性詩人・作家たちであった。ディキンソンは女性として、彼女たちの情熱的で力強い生き方を模範として仰いでいたと考えられる。
7. エミリの父エドワードは Yale 大学を首席で卒業した秀才で、町の弁護士・アマースト大学の財務理事・マサチューセッツ州会議員、その後、マサチューセッツ第10区選出の国会議員をも務めた。また兄 Austin はハーヴァード大学の法学部の出身で、弁護士。二人とも、当時としては最高の教育を受けた。手紙の後半に見えるように、ディキンソンは向学心が旺盛で、「私は学びたいのです。どのようにしたら成長できるのか教えてくださいませんか」と書いている。つまり、彼女は、（女性として）大学に行く機会が与えられなかったので、ヒギンソンに文学上の先生になってくれと懇望しているのである。つまり、この手紙は必死の思いで、取りすがっている手紙であるとも取れるので、従ってヒギンソンは返事を余儀なくされたと思なすことができる。
8. これは1850年頃、父エドワードの法律事務所で働いていた男性で、エミリに Emerson の詩集をプレゼントした Benjamin Newton を指す。しかし、彼は1857年、アマーストを離れ、Worcester に行き、そこで他の女性と結婚、結婚の3年後には結核のため死去した。このニュートンはエミリの将来を「大詩人」と見定めて、期待していた。そのニュートンの去ったところのウスターの町にたまたま当時住んでいたヒギンソンに、ディキンソンが、その意味でもある種の近しさを覚えていたことは確かであろう。
9. 最初のアメリカ語の辞書であった Noah Webster の *An American Dictionary of the English Language* (1828年刊)。その間、彼女には指導してくれる男性が不在だったと言う意味になる。

10. 「それからもう一人に出会った」とは、フィラデルフィアの牧師 Wadsworth 師と考えられる。ディキンソンは父の国会議員の任期の最後の年、ワシントン経由でフィラデルフィアに行き、そこでワズワース師の説教を聞き感動し、彼に手紙を書き送り、文通が始まった。彼とは生涯に2度、アマーストの自宅で会っている。
11. 「友達は丘、夕日、犬」とは、つまりディキンソンは孤独であって、(力強い男性の) 支えを必要としていたということを、暗に伝えた文章と見られる。
12. 「真昼時の水たまりの音は、ピアノよりすばらしい」。これは実に詩的感性に富んだ表現である。彼女がピアノの心得があるということを伝えると同時に、それも大したことはありませんという謙遜の意味を伝え、同時にまた、自分がしっかりした教育ある家庭の出であることを伝えているわけである。
13. 父は書類鞆 (briefs) のことで忙しいと言っているので、父は商売人ではなく、医者でもなく、地方の弁護士か何かで、相当の地位のあるインテリであることを示している。そして家庭的には宗教的に敬虔な者たちであることを示して、牧師出身のヒギンソンの是認を取り付けると同時に、自分だけは宗教的に異端であると断っているわけである。
14. ここまで読んだヒギンソンは、彼自身かつて州会議員に the free soil 党から立候補し、落選した経験から、既にこの“E-Dickinson”なる女性がアマーストの名家の女性で、元の国会議員、現在州会議員のエドワード・ディキンソンの娘であることを悟ったと思われる。つまり退屈どころではなく、興味津々となったはずなのである。
15. ホイットマンについては、ヒギンソンが尋ねたと思われる。
16. Harriet Spofford の“Circumstance”は、*Atlantic Monthly* (1860年4月号) に掲載された短篇。一種の恐怖物。
17. 新聞社からの二人とは、Samuel Bowles と Josiah Holland と見なされる。「私自身のことは、その価値を値踏みできない」と書いているので、恐



らくディキンソンが詩の出版に興味があると見たのであろう、ヒギンソンは彼女の詩は出版には適さないので出版を暫し待たせたらどうかと伝えたとと思われる。それは次便によって明らかになる。

18. 最後になって、*Atlantic Monthly* 誌の巻頭の文章を見たので、それで第一の手紙を書いたこと、それで、私のことを見捨てられないと知っていたことを述べ、感謝の言葉を述べるとともに、同封した詩についてのさらなる添削と評価をお願いし、次なる便を相手にせびろうとしているわけである。ジョンソンの調べによると、この手紙には3詩が同封されていた。それらは“*There came a Day at Summer’s full,*” “*Of all the Sounds dispatched abroad,*” と、“*South Winds jostle them.*”であったという。これらの詩については、今度はうって変わって、ヒギンソンの誉め言葉が届いたということが次便によって窺われる。

[ L 265, 1862年6月7日 ]

親愛なる友へ、

あなた様のお手紙で酔うことはありませんでした。前にラム酒を味わいましたものですから。<sup>1</sup> ドミゴは一度だけ訪れるものです。でも、あなた様のご意見ほど深い喜びを感じたことは、ほとんどありませんでしたので、あなた様に感謝の気持ちを口に出そうとすると、思わず涙で言葉に詰まります。

私に詩の手ほどきをしてくれた、今は亡き個人教授の先生は、私が詩人になるまで生きていたいと言っておられましたが、死は何ともできない暴徒みたいなものでした。<sup>2</sup> そういうわけで、その後も、果樹園に突然射す日の光、ちょっとした風の吹き方が、私をはっとさせ、そのとき心が痺れました。まさにそのとき、私の詩が生まれ、心を軽くしてくれました。

あなた様からの二番目のこの手紙は私を驚かせ、思いがけず、瞬時、私の心を揺すぶりました。あなた様からの最初の手紙は、不名誉となりませ

んでした。なぜなら、真実というものは、恥ずかしいことではありませんから。私、あなた様の公平さに感謝致しました。でも、私の歩みを静めてくれる鈴を落とすことはしませんでした。恐らく、香油の方がよかったのかもしれないね。<sup>3</sup> なにしろ、あなた様は、まず最初に、私に血を流させたのですから。

「出版」は遅らした方がいいとのご助言には微笑してしまいました。「出版」ということは私の考えにはございませんでした。丁度、魚の鱗が大空に対するように無縁のものでしたから。

もし名声というものが私に属するものなら、私はそれから逃げだすことはできませんし、もし名声が私のものでないのなら、いかに長い間、それを求めたからとて、私からすり抜けてしまうでしょう。そして、私の犬ですら私を見捨てることでしょう。そういうわけで、私には今の素足の身分の方が好ましいのです。<sup>4</sup>

あなた様は、私の足取りが「痙攣」していると考えておられます。先生、私は危機の中にいるのです。<sup>5</sup>

あなた様は私が「抑制を欠く」と考えておられます。私は裁かれる法廷がないのです。<sup>6</sup>

私に是非必要だとお考えの「友人」でいて下さる暇がおりでしょうか。私の姿は小さいですから、あなた様の机上を一杯に致しますまい。ネズミの様にがりがりする物音も立てますまい。あなた様の本棚を噛んで歪めることも致しません。

あなたのお邪魔にならない程度に、私の書いているものをあなた様のところに持って来たら、そして、その内容を明確に述べたなら、それが私にとっての抑制です。

水夫は北そのものを見ることはできません。しかし、羅針盤の針はそれを指し示すことができると自ずから知っています。「暗闇で私に差し出された手」、私は私の手を暗闇の中に入れてみて、そしてそれを引っ込めま

す。<sup>7</sup> 私はいま「サクソンの血」<sup>8</sup>を持っていません。でも今は、  
私がかく普通の施しを求めたら、  
私のとまどっている手に、  
何と見知らぬ人が王国を押しつけたかのよう、  
それで、私は当惑して突っ立つばかり、  
私が東の方（かた）を求めたら、  
何と私に朝を持って来てくださったかのよう。  
すると、それは紫色の堤を盛り上げ、  
夜明けで私を砕いてしまった！<sup>9</sup>

でもどうぞ私の先生になってください、ヒギンソン様。

あなたの友

E. ディキンソン

【評釈：L 265】

1. 今回は首尾よく批評家ヒギンソンから賞賛の言葉を獲たのだが、それも陶醉とばかりは行かなかったというわけである。「かつてラム酒を飲んだ」とは他の誰かに激賞されたことを意味しているが、それは恐らくニュートンの激賞を意味するのではないかと推測される。
2. 第2パラグラフで、早速そのニュートンのことを述べている。一人の男性（ヒギンソン）に対して、私には現在友達がいないと告白し、なおかつ今は死んだ男性について言及するのであるから、これは一種の恋文であって、二人の関係は急速に親しい調子になっていることを示している。
3. 最初の手紙で大量の添削をされ、大いに傷けられたので、そのことについて「香油」を持って来て傷口を直して貰いたいと思うほどだ（第2便のL 261の「病気になって寝ながら書いている」という言葉を参照）と言っているのである。ヒギンソンの、自由詩を書いたらどうかという忠告に対しては、韻律詩にこだわることを述べている。

4. これは恐ろしいまでのディキンソンの開き直りと思われる。つまり、私は名声を求めて出版する者ではなく、もし私の詩に生命があるなら、名声は後からついて来るとしている。つまり、それはいつの日かの出版、或いは死後出版を覚悟している者の文章と見られる。実際にエミリの詩は、妹の手によってヒギンソンとトッド夫人の助けを得て、死後出版されたわけだが、そこには、エミリの妹に対する、死後出版についての遺言的依頼があったものと私は推断している。そうでなければ、いかに妹の Lavinia が姉の詩才を信じていても、煩瑣な原稿の束を整理して、詩集の刊行までこぎ着けるのは困難だったものと思われる。
5. 「危険な状態にある」という意味は、私にはよく分からない。おそらく何らかの精神上的危機を意味しているのであろうが。
6. 「法廷がない」とは、それを公平に判断してくれる者たちがいないということで、一般の読者たちが判断すれば、別の結果になるやも知れないと信じるので、あなた様のご意見をそのまま受け入れるわけにはいかないという意味にとれる。
7. 「暗闇に手をさしのべた」とは、ヒギンソンが暗闇で導きの主になると確言してくれたことを意味していると思われる。
8. 「私はサクソンをもっていません」という意味は「言葉が出てこない」の意。詩の276番で“Saxon”の代替語として“English Language”を考えている。
9. ここの最後の詩は、ヒギンソンへの感謝とともに、愛の告白とも見られる。

[L 268, 1862年7月]

お信じに出来ないことでしょうか、写真はないのです。肖像写真を持っておりませんが、私はミソサザイのように小さく、私の髪の毛は栗のいがのように固いです。そして、私の眼はちょうどお客様がお残しになっていたグラスの中のシェリー酒みたいです。これでよろしいでしょうか。

父はこの件でときどき心配しています。父が言うには、死というものはいつ何どき起きるかも知れないと。それで父は他の者たちの肖像画は持っていますが、私のそれは持っていません。でも、こんなものは2、3日経てば、すぐと消えてしまって、不名誉を残してしまいます。私のことを気まぐれだと思われたいでしょうね。

あなたは「暗闇」ということをおっしゃいました。私は、蝶と蜥蜴と蘭のことを知っております。

これらはみんなあなた様の同郷の者たちでしたよね。

私はあなた様の弟子であることが嬉しいです。その親切にはお返しできないくらいです。

もしご承諾くだされば、私は今ここで復唱致すくらいです。

どうぞ私に間違いがあれば、ご自身になさるように、率直に言ってくださいませ。と申しますのも、私は死ぬぐらいならむしろ怯むことの方がいいからです。人が外科医を呼びますのは、骨を誉めて貰うためではなく、骨を接いで貰うためです。先生、内部のひび割れはもっと危険です。それで、このことで先生、私はあなた様に従順と、私の庭からのお花とすべての感謝とをお持ち致します。多分、私のことを笑っておられるのでしょうね。それでも止めることはできません。私の仕事は「円周」です。慣習を知らないのではないのですが、それでも、夜明けによって捕まえられたり、夕日が私のことを見たりしたら、私は美の中でただ一匹のカンガルーに過ぎないと感じます。先生できましたら、私に教えて下されば... このことが私を苦しめておりますので、教えて頂きましたら、それが消え失せるのではないかと思うわけです。

あなた様は、私の成長ということの他に、多くのお仕事をお持ちなので、私がお邪魔にならない程度にどれくらい訪れたらいいかご指示ください。そして、あなた様が私のことを受け入れて下さって後悔なさったり、私のことが見込み違いでありましたら、私のことを追いついてください。

私が、自分のことを詩の代弁者と述べておりましても、それは私自身のことを意味するのではなく、仮想の私のことです。「完成」ということにつきましては、先生のおっしゃることは正しいです。

今日は、昨日のことを詰まらないものに致します。

あなたは「ピッパ過ぎゆく」について言及されました。私はこれまで「ピッパ過ぎゆく」について言及された方を知りません。

私の態度は、何かしら夜みたいに不得要領でしょうか。

感謝の言葉を言いかけて戸惑います。あなたは完全な力をお持ちですか。あなたが持つておられない喜びを私が持つておりましたら、喜んでそちらにお持ち致しますけれど。

あなたの弟子

【評釈：L 268】

1. 「写真がない」とは本当であった。ディキンソンの写真については、彼女が Mount Holyoke Female Seminary に在籍していた17歳頃に撮られた、恐らくダゲロタイプのため右左が逆になったと思われる写真が一葉残っている。次なる写真ならぬ、文章による自己自身のデッサンは、自分を謙遜しておどけて表現しているが、実に忘れがたい印象的な表現で、これだけでも、ディキンソンがただならぬ天才を持っていたことを示している。これでお分かりでしょうかと記して、実は私の目的は、あなた様の詩作上の弟子になりたいのであって、恋人になろうという気持ちはないのだという意味の手紙であると考えられる。それで最後のサインを、わざわざ「あなたの弟子」（“Your Scholar”）と記しているのである。
2. 彼女が理科的観察力を持つており、そうした者たちの観察が好きであったことは、彼女の自然描写の詩に知られる。特に蜥蜴という言葉が、彼女が単にロマンテックな夢を見ているのではなく、足が現実に着いていたことを示している。

3. 目的は、詩を直して貰うことであるので、誉めて頂く必要はありません、厳しくご指導くださいという意味。
4. 「仕事は円周」とはディキンソン詩理解のキーワードである。丸い円であるとともに、中心でなくその周辺、つまり独自の見方で世界を切り取って、それに言葉を与えるのが詩人の仕事という意味であろうが、曖昧で含蓄のある語である。今はこのままにしておく。
5. 多忙なあなた様のことから、ご指導はそちらのペースに合わせますが、どうぞ師であることをお願いしますという意味。
6. 詩の「私」とは、私自身のことを指すのではなく、それは仮想したペルソナ（仮面）であると、ディキンソンは断っている。しかし、この「私」と「仮面」との関係は実は込み入っていて難しい問題である。
7. そのような、文学上の専門的な話ができるのはあなた様以外にいないので、有り難く思っています。改めて師になってください、という意味であろう。
8. 「力がありますか」とは、ある意味では不遜な言であって、「私の真価をあなたが真に理解でき、私のことを指導できますか」といった、挑発的な言辞とも取れる。しかしそれは微妙なニュアンスで書かれているので、そのように断定的に取れるものでもない。時には、手紙 (L274) のように、ヒギンソンから激しくその高慢な態度を叱責されたことを示すような手紙もある。
9. これも謎めいているが、要するに、私もあなた様に差し上げられる何らかの“Power”を持っていると自負している文章と考えられる。
10. 写真を要求してくる男性に対して、自らを卑下してコミックな描写で表現し、私は恋人でなく、御弟子さんになりたいのです、私の詩への思いは真剣なのですよ、と答えたディキンソンの方が一枚上手を行っていた、そんな手紙と見なすことができる。なおこの手紙には詩4編が同封されたが、それらは“Success is counted sweetest” (67); “Your Riches taught me” (299); “Some keep the Sabbath going” (324); “Of Tribulation” (325) で

あった。

[L 271, 1862年 8月]

親愛なる友、

これならもっと整っておりますでしょうか。「真実」につきましては有り難う存じました。

私は生命の中に皇族とかを持っておりません。それで私は自分を治めることができないのです。それで、私がなんとか整えようと致しますと、私の小さな力が爆発しまして、それで私をすっかり裸にし、焼けこげにさせてしまうのです。

確か、私のことを「気まぐれ」とおっしゃったのだと思います。直せることなら、助けて頂けませんか。

森の真ん真ん中で、息を止めさせるようなプライドは、私たちのものではありません。

あなたは、私が小さな間違いを告白しながら、大きな間違いを見過しているとおっしゃいました。なぜなら、私は「文字」が読めるのだからと。でも、眼が見えない故に無知蒙昧だということになりますと、それは先生の方の御責任となりましょう。

「男の人や女の人を避けること」についてですが、そんな人たちは聖なることを声高に話しますので、それが私の犬を当惑させるのです。そんな人たちが自分の領分に留まっておられるのなら、犬も私も反対致しません。カール（口）は、あなたの気に入ると思います。彼は無口ですし、勇気があります。先生は、私が散歩していたときに見つけたくるみの木のことが、きっと気に入られると思います。私、それを突然見つけたのです。そのとき空全体が花咲いていると感じました。そして、果樹園では、音のない音が聞こえますが、私は、それを他の人たちにも聞いてほしいものです。お便りの中で、「今」は会いに行けないがと書いておられました。私はそれ



にお応え申しませんでした。それは、こちらにご返事の用意がないからというのではなく、私自身、あなた様にはるばる来て頂く価値を持つ者ではないからだったのです。

そんなにも大きな喜びをお願いして、私のことをすげなく否定されたらどうしようと懸念しておりました。

あなた様は「知を越えて」と言われます。私が、あなた様のことを信じているというので、どうぞからかわないでください。でも、先生、まさかそんなことをおっしゃっておられるのではないでしょうね。男性の方々は、みんな私に「何で」と言われます。でも、私はそれがファッションだからだと思っております。

少女の頃、森によく出かけておりましたとき、蛇が噛むよなどと言われたものです。また、毒草の花を摘んでいかないと、森の幽霊からさらわれるよとも。私はそれでも、森をずんずんと歩いて行きましたが、天使以外には出会ったことがありません。天使たちは、私よりもずっと恥ずかしがり屋で、それで、多くの人たちがやっているとかいうまやかしというものを信じることができないのです。

私は、先生のお教をいつも理解できないのですが、守るつもりではおります。

或る一つの詩の一行に私は印をつけました。と申しますのも、その詩を作った後、その一行に出会いなおしたからです。私は他の人が混ぜあわせた絵の具を意識して使わないことにしております。それは私の絵の具から描いたものなので、その詩行を取り逃がしたくないのです。

ブラウニング夫人の肖像画を持っておられますか。私に三枚送ってくださる方がありましたので、もし、お持ちでなければ一枚を差し上げます。

弟子より

〔評釈：L271〕引つ込み思案の隠遁者と思われるディキンソンが、かつて

は犬のカルロを連れて、野山を旺盛に散歩していたことを示す文章である。先生のお教えをいつも理解できないのですが、守るつもりではおりますとして、相手の批評を有り難く感じながら、必ずしもそれに同意しないことが多いことを示している。またブラウニング夫人に度々言及しているのは、夫人の運命が、詩を介しての中年の者同士の愛を意味するからであろう。実際に彼女は、ヒギンソンにブラウニング夫人のお墓の写真を貰ってくれと言って、押し付ける様にして送付している。

[L 290, 1864年6月初, Cambridge より]

親愛なる友、

危険な状態なのですか。

あなた様が負傷されたこと存じませんでした。詳しいことを知らせてください。ホーソンさんがお亡くなりになりました。

私は昨年9月からと今年の4月からボストンに行って、お医者様に掛かっておりました。お医者様は私を離しませんでした。でも私は牢獄で仕事をしていました。そして私自身にお客を迎えていました。

カルロは一緒に来ていません。なぜなら、牢獄の中では彼は死ぬだろうからです。山々はここに持って来れませんので、私は今は神々を持って参りました。私が駄目になる前に、あなた様にお会いしたい気持ちがつづります。あなた様のご健康状態を教えてください。

私はあなた様からのメモを受け取って、驚き心配しております。

私を知るニュースは、

それは不滅からの

毎日の知らせ。

私に鉛筆をくださいませんか。

医者が私のペンを取り上げてしまいましたものですから。

私の文字がもし間違っていると困りますので、私の住所を記した宛名を

同封しました。あなたが、ご回復されたと知れば、私の病気も好転致します。

E. ディキンソン

〔評釈：L 290〕これはヒギンソンが、南北戦争でアメリカ初の黒人部隊を率いて従軍中、負傷し、マサチューセッツに帰還して、療養していることに対して送られた手紙。同時に自分が眼病のため、ボストンに出かけていたこと、手術後、医者から読書・執筆を厳禁されていることを伝えている。

〔L 316, 1866年初〕

友よ、

私の犬でさえ理解できている者ですから、他人様の眼から逃れようもありません。

私は喜んであなた様にお会いしたいと存じます。でもそれはどうも実現でき難い、幽霊のように現実味のない喜びのように思えます。私はボストン行きについては、自信がありません。

五月にはお医者様を訪問する約束をしております。しかし、父は私があな様にお会いすることには反対しております。私には父がいつも一緒について来るという習慣からです。

アマーストでは、遠いのでしょうか。

ここでは接待役の私は小さい者ですが、真心から歓待申し上げますのに。

もし、私の「蛇」の詩をご覧になられて、私が、それは私から奪い取られたのだと申し上げ、あまつさえ、3行目の句読点は駄目にされていると申しあげましたら、私が嘘を言っているのだなどと思わないでください。第3行と第4行は一行続きなのです。いつでしたか私は出版しないと申し上げました。私はあなた様が私のことを嘔吐きだと、お考えなのではないかと恐れます。

もし、私が、これまで同様ご教示くださいと懇請したら、随分不愉快でございましょうか。

私は我慢強いです。いつも変わらず先生のメスを拒みません。私の私の（ママ）歩みの緩慢さが、先生をいらいらと苦しめるのなら、先生は私よりも先に知っておられるはずですよ。

小さな形のもの以外は、  
どんな生命にも丸いものはない。  
小さきものはある地点までは急成長し、  
見せびらかすようにして、そして終りとなる。  
大きな生命はゆるやかに成長し、  
遅れてようやく実を垂れる。  
黄金の林檎園の  
ヘスペリディーズの夏は長い。

【評訳：L316】これは、ボストンで会いたいとするヒギンソンの誘いを、ディキンソンが断り、むしろアマーストに来てほしいと言っている手紙である。常に側に父が付いていないと、外出もできなかつたことについては、何らかの病（過度の隣人恐怖症あるいは緊張症）か何かの問題が彼女の側にあつたのではないかと思われる。それと同時に、あまりにもピューリタニックな謹直な父親は、娘が一人で都会に出かけ、社交活動に従事することには大反対で、当時の女権論者や女教師たちとは一線を画そうとしていたのだと思われる。ディキンソンと父との関係は、これまでのところ実はあまり明らかにされていないトピックの一つである。二人の関係は、親密かつそよそよしいという、一種問題のある父娘の関係であつたと思われる。

【L319, 1866年6月9日】

友よ、

そのご婦人には感謝です。気に掛けて頂いてとても優しい方です。

私のボストン行きは没にしてください。

父もその方がよいと申しております。父と一緒に構わないのですが、私のあなた様へのご訪問には反対しております。

アマースト・インに私のお客様として来て頂きたいと存じます。私がお会いしましたら、私はもっと改善されて、きっと嬉しく存じます。なぜなら、何が間違いであるか私には分かると思うからです。

あなたのご意見は、私に厳粛な気持ちを持たせました。お見込み違いとならないように致したいと存じます。

有り難う存じます。カルロは次の詩のように望んでいます。

時とは困難の試練、

しかし治療にあらず。

さようなものとなれば、

病気もまた存在しあたわざるとならん。

今もなお丘を持っています。私のジブラルタルの残滓を。

自然は、友が不在となっても、一人で遊んでいるみたいです。

あなたは不滅性のことを言われました。

それは「洪水の主題」です。あなた様は鱭のない心にとって岸辺こそ最も安全な場所だと、言われました。今は沈黙してしまった仲間の死以来、私は山野をあまり歩きません。でも、あなたがお話になった「無限の美」は、あまりに近くにあるので探すことすらできません。

魅惑から逃れるには、急いで逃れなくてはならない。

天国は選択次第。

アダムなくしてエデンを所有せんとするものは、廃嫡されん。

ディキンソン

[評訳：L 319] ここの部分のみ、彼女は自分の名前を「弟子」（“Your

Scholar”) でなく、「ディキンソン」と記している。つまり、私はディキンソン家の者であるという意味であろう。またヒギンソンに対しては、自分のことを呼ぶのに「エミリ」を一貫して使用していない。つまり、ディキンソン家を代表するかのようにして、構えている感じなのである。

[L330, 1869年6月]

友へ、

手紙は、肉体の友を欠く精神だけです。私にとって不滅のように感じられます。話している場合、態度や口調のせいで、考えの中には様々の力が加わることで、ようやく一人歩きできるように思えます。

あなた様のご親切に感謝致したく存じますが、私は支え切れぬ言葉を用いることができません。もしあなたが、アマーストへいらして下されば、嬉しく存じます。ただ、「感謝」とは何も持たざる者がおずおずと差し出す富です。あなたは真実のことを話されたのだと思います。高貴な方はそうですから。でも、あなたのお手紙はいつも私を驚かせます。私の生活は単純そのもので、ひたすら堅いので、誰に対してもご迷惑をおかけするようなことはありません。

「天使から見られる」ことは、ほぼ私の方の責任ではありません。

そんなに素晴らしい場所 [=天国] では、作り話をするのは難しいです。しかし、試練の厳しい償いはすべての人に許されております。

私が少女時代、その素晴らしい一節を聞いた覚えがあり、「力」のことが好きでしたが、当時、「王国」や「光栄」もその中に含まれているとは知りませんでした。

あなた様は、私が独りで住んでいることについて言及しておられました。田舎はその住人であれば別ですが、他所からいらした方には退屈なものです。あなた様は、親切にも私に会いたい旨、おっしゃってくださいました。機会を見つけてアマーストまで来てくださるととても嬉しいです。私

の方は、父の屋敷を越えて、他の方の家や町に出かけることはございませんのです。

私たちの偉大な行為について、私たちは分かっておりません。

あなた様は、私の生命をお救いになったことに気付いておられません。爾来、親しくお会いして、御礼申し上げることは、私の願い事の一つでした。子供は花が欲しいときは「お願い」と言います。「お願い」と。私が欲しいものをお願いするときも、このように言うほかありません。

私がこの様にお願いするたびに、いつもお許しを請います。なぜなら私は他にお願いの仕方を教わって来なかったからです。

ディキンソン

〔評釈：L 330〕この手紙では、「あなた様は、私の生命をお救いになったことに気付いておられません」と述べており、ディキンソンの側からのヒギンソンへの感謝が、（相手は知らないかも知れないが）実は、通り一辺のものでない、自分の生命を救うようなものであったことを示している。

次は、ヒギンソンからディキンソンへの手紙で、彼が8年の文通の後に、実際に会うためにアマーストにやって来る前の手紙である。

〔L 330 a, 1869年5月11日〕

友よ、ときどき、私はあなたの手紙と詩を取り出します。そして、その奇妙な力を感じるとき、あなたにお便りを書くことを難しく感じるのも無理はありません。そうして何カ月も過ぎるというわけです。あなたにお目にかかりたいという強い欲求があります。そして、もし私があなたの手を取ることができたら、私はあなたにとって、何らかの意味を持つだろうといつも感じております。しかし、それまでは、あなたは炎の霧の中にお隠れになっておられて、それであなたに到達することはできませんで、ただただ、たぐい稀なる光輝を喜んでいるだけなのです。毎年、何とかしてア

マーストへ行ってお会いしようとしてみますが、なかなか難しいことです。と申しますのも、講演に行かねばならぬことはしばしばですが、楽しみから出かけることは、私の場合、稀だからです。あなたにお会いするためなら、ボストンだったら折があれば喜んででかけます。私のあなたに対する気持ちはいつも変わりません。あなたが送って来られるものに興味が減じることはありません。私はあなたのことについてしばしばお聞きしたいと思っておりますが、私が書いていることはきつと的外れで、あなたが持っておられるお考えの素晴らしい切っ先を掴み損なっているのではと存じます。

私があなただのことを誤解するのは充分ありそうです。それでも私はやってみるわけです。もし一度あなたにお会いして、あなたの存在が実在のものであると分かれば、私も落ち着きます。あなたが伯父さんを持っていると知って、あなたのことを余計身近に感じています。でも、あなたと伯父さんほどお互いに似ていない人も、考え付くことは難しいです。その伯父さんとも、もう7、8年会っておりません。私はかつてのあなたのことを知っているご婦人にお会いしましたが、その人もあなたのことをあまり語ってくれませんでした。

あなたが、そんな風に独りで住むことができるということを理解するのは難しいです。あなたには、そんなにも立派な様々なお考えが起こっているみたいですし、控え目の犬のお友達もおられるわけですし。でも、人がある地点を越えて、物を考え込んだり、そんなにも輝やかなしい光を持つということであれば、どこにいても孤立することでしょう。そうなると、場所というものは、あまり相違を作らないことになりませぬ。

あなたは、時々ボストンに来なくてはなりません。ご婦人たちは皆、ボストンに来ます。毎月、第3月曜日に、チェスナット通り13番地のサージェント夫人の所で、朝10時からの会合にいらっしゃるようお誘いできませんか。そこでは一人の人が、ちょっとした論文を読み、他の人たちが、お互



い話したり聞いたりするのです。来週の月曜日は、エマスンさんが読み、それから、トレモント・ブレイス3番地で、婦人クラブの集まりがあります。そこで、私がギリシャの女神についての論文を読み上げることになっています。あなたがいらっしゃるには都合がよい時でしょう。でも、私としては、私自身がそんなに忙しいときでなく、できたらもっと暇の他の日に来て頂きたいものです。と言いますのも、私の目的は、あなたをもてなすことでなく、お会いすることそのものにありますから。私は、6月25日\*から28日の記念週にボストンに参ります。或いは6月の音楽祭なら、あなたもお気に召されることでしょう。私はこのことを真率に申し上げているのです。夏には、海の空気を必要とされませんか。散文でも詩でもいいですから、書いて見せてください。今後私はあまり気難しいことは言わず、さりとて何にも言わないのも何ですから、無骨なことを喜んで書き送ります。

常にあなたの友

(著名の部分は切り取られている)

\*サージェント夫人の所で、同日、もう一つの会合があり、ヴァイス氏がエッセイを読みます。私はあなたを招待する任にあるので、あなたはただ玄関のベルを鳴らして入って来られたら結構です。

[評釈：330 a] ヒギンソンからの手紙は、当代の批評家・政治運動家からの文章とて明晰そのものなので、コメントはいらないと思われる。文中「あなたのことを知っているご婦人」とは、ディキンソンの幼なじみで、当時人気ナンバーワンの女性作家 Helen Hunt Jackson のこと。

[L 342, 1870年8月16日]

友へ、

私は在宅しております、そして喜んでおります。

あなたは確か15日とおっしゃっていたと思いますが。信じられないこと

は信じられない故、かえって驚かすことはありません。

E. ディキンソン

〔評釈：L 342〕これはディキンソンが、アマースト・インに滞在中のヒギンソンに、使いの者を通じて直接手渡しさせた短いメモ。

一日遅れであったが、アマースト・インに到着したヒギンソンに驚くとともに、喜んでお会いしたいという意志表示で、彼女は自分の名前を“E”と表現している。つまり、ディキンソン家の者であると同時に、個人としての自分であることを表示している。しかし“E”と記して、女性名の“Emily”とは記していないのが面白い。

〔L 342 a, 1870年 8月16日, ヒギンソンから妻の Mary へ〕

アマースト、火曜日、10時 P.M.

今夜遅くまで起きていて、君に E.D のことを書くつもりはないが、でも、もし君がストッダード夫人の小説を読んだのなら分かるだろうが、この家は、家族の各人が個々に動いている、そんな感じの家だった。で、私は彼女だけに会ったというわけだ。

郡の弁護士の大きな、褐色の煉瓦造りの家で、大木があり、庭があった。そこで私は名刺を差し出した。居間は薄暗くひんやりとしていて、何かしら堅苦しく、二三冊の本と版画と蓋が開けられたピアノがあった。それらの中には、私自身の「マルボーン」と「野外随筆」もあった。

入口のところで、子供が走るようなパタパタした足音が聞こえて、小柄で見栄えのしない女性が、滑るようにしてはいつて来た。髪は二手にすつと分けられていて輪で止められていた。顔は若干ベル・ダヴに似ていたが、ベル・ダヴほど不器量というわけではないけれど、目鼻立ちは決してよくなかった。シンプルで清潔そうな白いうね織りの服を着ていて、青い網目模様のウステッドのショールを羽織っていた。

彼女は2本のデイ・リリーの花を持って、私のところにやって来て、子供のような感じで、私の手にそれを握らせると言った。「このお花は自己紹介代わりです」と。こわごわとした柔らかな子供のような声だった。そして息を殺すようにして言った。どきどきしていることお許しください。私は見知らぬ人には会ったことがございませんので、何と言っていいかわからないのです、と。しかし、彼女はすぐ話しだして、それらからは、ひっきりなしに、恭しそうに話した。たまさか、私にもどうぞお話しくださいと言って、話を止めるのだったが、またもや話を続けた。アンギー・ティルトンとアルコット氏のような話し方と言えいいだろうか。でも、彼らとは違って、単純かつ真摯そのもので、沢山のことを話した。君はそれらをきくと馬鹿馬鹿しいと思うだろうが、私は頭がいいなと思った。そしてまた、君が好むだろうようなことも言った。それをいくつか、書き付けておこう。

ここは愛すべき土地で、少なくともどっちを見ても山とまでは行かないが、丘が見える。僕は学長のスターズ博士に会った。しかし守衛のcd氏がいなかったの、校舎の中にはいることはできなかった。明日また再訪しよう。バーンフィールド夫人を訪問し、5人の子供たちに会った。夫人は病気のときのH.Hにそっくりだ。とても丁寧で親切だった。

では、お休み。睡魔に襲われて、ここまで書くのが精々だった。

匆々

僕はここに2時に着き9時に辞去した。E.D.は前の晩、一晚中君のことを夢で見たそうだ。（僕のことでない。）そしたら翌日、私がここに来るとい手紙を受け取ったと言うわけだ。彼女は君のことを、僕がシャーロット・ホースのようだと言ったことで知っていたに過ぎないのだが。

「女たちはお喋りします。男たちは沈黙しています。それで、私は女たちが恐いです。

「父は土曜日にだけ読書します。父は、淋しく厳めしい本を読みます。

「もし私が本を読んで、私の身体全体が冷たくなり、火によってでも私を温めることができないと感じたら、それこそが詩なのだと分ります。

「もし私が、私の頭の天辺が切り取られるように身体で感じたら、それが詩なのだと分ります。これが唯一、詩を知る方法です。他にどんな方法がありますでしょうか。

「大抵の人たちは、考えることもなく、どうして生きているのでしょうか。この世の中には多くの人たちがおります。（通りで気付かれたと思いますが。）そんな人たちはどのようにして生きているのでしょうか。朝、服を着るどういう力があるのでしょうか。

「私が、かつて視力を無くしたとき、誰か他の人に本を読んでもらうための、本物の本がいかに少ないかを考えて、むしろ安心したことがあります。

「真理とは実に稀なことなので、それを人に告げることは嬉しいです。

「私は生きることに恍惚を覚えます。生きていると感じただけで、十分な喜びです。

僕は、何らかの仕事に就いて働きたくはないか、この場所を離れたくはないか、訪問者たちと会いたくはないかと聞いた。

「私はそんなことは考えたこともありません。この先もそんなことが欠けていることなど、全く意に留めないでしょう」（そして、付け加えた。）

「私は自分のことを、十分強く表現し切っていません。」

彼女は家のパンを全部作る。というのも、お父さんが彼女の作ったパンしか食べたくないのだ。彼女は言う。「そして、パイも食べなくてはなりませんよ」と。これを、実に夢見心地で喋るのだった。あたかも彗星を夢見るかのように。で、彼女はパイも作るというわけ。

（その夜、ヒギンソンは日記に次のように記している。アマーストに行く。2

時到着。スターズ学長と会う。バーンフィールド夫人とディキンソン嬢と会う (2度)。予想通りの驚くべき体験だった。快適な田舎町。夏の午後とて、実に深閑たるもの。

(翌日、妻にまた書き送っている。そして E・D についての覚え書きを同封している。ヒギンソンはその手紙の日付を「水曜日の午後」と記している。)

[342 b, 1870年 8月18日, ヒギンソンから妻 Mary へ]

私はホワイト・リバー連絡所で、夕食のために一時滞在し、その後2、3時間で、リトルトンに着き、そこからベツレヘムに向かおうとしている。今朝、9時にアマーストを離れたのだが、昨夜、君に手紙を送ってある。リトルトンでこの手紙を送ることにして、私の鞆にはいつている E・D についてのもう一枚を同封する。

彼女は別れるときに言った。「感謝は自ら現れることができず、ただ秘されております」と。

僕はアマースト大のスターズ学長と、彼女のことについて話した。彼と馬車に乗ったのだが、一緒にいてとても楽しい人だった。

今日出発前に博物館に行き、とても楽しかった。僕の腕の長さほどの隕石を見たが、436ポンドもあった。他の惑星から飛んで来た大きな断片だ。コロラド州に落ちたものだ。今は絶滅してしまった鳥類の足跡の化石はユニークでとても驚いた。他のいろんな物も見た。ディキンソン氏に、今朝方ちょっと会った。瘦せておられて素気もないひとで、口を開かない人だった。それで彼女の人生がこれまでどんなものだったか分かった気がした。スターズ博士は、妹さんは姉さん自慢なのだと言っていた。

僕は、ここに転がっていた隕石をつい盗みたくなるぐらいだった。でもそれはガラス・ケースの下にあったしね。

汽車の中で、夫と息子と一緒にビュラード夫人に出会った。僕は彼女と

一緒に馬車に乗る予定だ。

隕石を何個が見たがすべて乾いていて焼け焦げていた。彼らはブラトルボロのサージェンツに滞在していると言ったかね。彼女の方は依然としてニューポートに行きたいと望んでいる。同封のブラウニング夫人のお墓の絵は E.D から貰ったものだ。「ティモシー・ティトカム氏」[ホランド博士] が彼女にあげたものだそうだ。

手紙を書く暇があったので、当地から投函する。

君がいなくて淋しいよ。でも、君は旅行が嫌だと来ているからね。

匆々

再び、E.D のこと

「『家庭』(“home”) って何か教えて頂けませんか」

「私は母というものを持っていませんでした。母というものは、困ったときに逃げ込める場所だと思うのですが。」

「私は15歳になるまで、時計を見て今何時だと言う言い方を知りませんでした。父は私に教えてやったと思っていたみたいですが、私は理解できず、今何時かを言うことができないと言うのが恐かったものです。それでそのことを他人から悟られないように、時間を尋ねることが恐かったです。」

僕が思うに、彼女のお父さんは、厳格というのではなく、ただ打ち解けないタイプだったのだと思う。お父さんは、子供たちに聖書以外の本を読んで貰いたくなかった。ある日、兄さんが「ガバナー」を家に持ち帰って来て、ピアノの蓋の下に隠しておいて、彼女に合図して二人で読んだことがあった。お父さんがついにその本を見つけ、不興がった。恐らく、これよりも先のことだろうが、お父さんの書生の一人が、二人がリディア・マリア・チャイルドのことを聞いたことがないというのでびっくりして二人に本を持って来て、戸口の草むらのところに隠しておいた。兄と妹とは、当時は短い服を着て、両足を椅子の足載せ台に載せていた子供だったのだ

ろうが、最初の本なるものを手にしたとき、彼女はうっとりとして「じゃあ、これが本なのね！もっと本が読みたいわ！」と言ったそうだ。

「物が私たちの心から過ぎ去るとは忘却なのでしょう、血肉となることなのでしょうか」

彼女が出会った人の中で、ハント少佐が最も興味深い人だった。彼女は彼が言った二つのことを覚えていた。まず彼女の大きな犬は「引力が分かっている」と言ったこと。次に「一年経ったら」またやって来るよと言った際に、「もし私が一年以内にと言ったら、それは一年以上の意味になるのだがね」と言ったことだそうだ。

僕が「いつか」再訪しますよと言ったら、彼女は言った。「『長く経ったら』とおっしゃった方が、かえって短時日で帰って来られましてよ、と。『いつか』では意味がないですわ」と。

長いこと眼を使わなかった後で、彼女はシェイクスピアを読んで、なぜ他の本も必要かと考えるようになった。

僕は、神経をそんなにも枯渇させてしまう人と一緒にいたことがない。彼女に触れられない先から、彼女は私の方からどんどん吸収してしまう。こんな人の近くに住んでいなくて幸いだっただ。

彼女はしばしば私が疲れてはいまいかと、気を使ってくれた。他人のことについて、随分思慮を巡らすよう人のように思えた。

[ヒギンソンが自分の妹たちに書いた次の追伸は、8月21日、日曜日の日付になっている。]

勿論、僕は旅をととても満喫した。アマーストで、僕は私の風変わりな文通者ととてもいい午後と夜を過ごした。そして大学の珍しい標本を見て過ごした。

[この面会のことを20年後回想して、ヒギンソンは『アトランティック・マンズ

リー』68号（1891年10月号）456頁に以下のごとくに記している。

私にはっきりと残された印象は、過度の緊張と異常な生活の印象であった。恐らく時間を掛ければ、私の意志からでなく、彼女の必要から私たちに強いられた何かしら緊張しすぎた関係を乗り越えられたものと思う。当然、単純な真実と日常の友人関係のレベルまで持っていってもよかった。しかし、それはちょっとやさつとのことではできるところではなかった。一時間の面会のごときで解決するには余りに謎めいていた。少しでも直接に調べてやろうとすると、彼女は殻に閉じこもりそうであった。そこで、私は森の中で丁度野鳥を観察する人がやるようにして、じっと座して観察するしかなかったのである。丁度エマソンが勧めていたように、銃を持たずに、私の鳥に名前を付けなくてはならなかったのである。

[評釈：L 342 a, 342 b] ヒギンソンの手紙は常識人のそれで、明晰そのものであるので、評釈は不要と思われる。ただ、ディキンソンの父についての描写は値千金の記録であろう。つまり、ヒギンソンはエミリの父親と暫し会ったわけだが、父親はよそよそしく口数が少ないので、それでそれまでのエミリの生活がどのようなものであったか直感できたと言っている。こうした手紙から窺われるディキンソンの父親像は、ピューリタンの権化のごとく謹直、言葉数は少なく、子供に愛情は抱いているが、弁護士業や大学の理事職・議会議員の仕事で多忙で、子供と遊ぶことはしない。子供たちに本は買ってやるが、しかし聖書以外は読むことを勧めないといった、真面目で、謹直で、要領があまりよくない、口数の少ない、いわゆる昔気質の家長的な男ということができよう。この様な人が、政治家を長年やっていたことには、若干理解に苦しむが、必要なこと以外には無駄口を聞かないタイプの男だったのであろう。しかし、そうした父へのエミリの心服というのは感じられて、エミリを巡っての、父親と他の男性との綱引きにおいては、常に父が勝ってしまっていたということであろう。何しろ、父はエール大学を一番で卒業した秀才で、また頑張り屋で、アマー



スト大学の財務理事を務め、鉄道をアマーストに引くのに尽力があり、また州  
会議員・国会議員をも務めた人物で、町一番の名士であったのであるから。

〔L 418, 1874年 7 月〕

父が生きていた最後の午後のこと、予感があったわけではありませんが  
私は父と一緒にいたいと思いました。母とヴィニーは眠っておりましたの  
で家は留守ということにしました。

私はよく自分一人で部屋にこもってしまうものですから、父はこのほ  
か嬉しそうでした。そして午後がふけて行くにつれて、「このまま午後が  
終わらなければいいのだが」と申しました。

父があまり嬉しそうなのでちょっと気詰まりでしたが、兄がやって来た  
もので、二人で散歩でもなさったらと勧めました。

次の朝、私は汽車のことがあるので父を起こしました。そしてそれが最  
後になったのです。

父の心は純粋で恐ろしく、私は他にこんな人がいるとは思えません。

不滅性というものがあって嬉しいです。でもそれを父に委ねる前に、私  
自身で試して見たかったです。

ボウルズさんが私たちのところに来ておられます。それ以外には誰も  
会っていません。父が亡くなって、あなたがここに居てくださったらと思っ  
たりしております。一時間でもあなたが構ってくださる時間とおありでし  
たら、この上もなく貴重な時間となりましょう。毎度のご親切に感謝して  
おります。

兄と妹はあなたからのご挨拶、有り難く存じております。

あなたの書かれた賛美歌は予言的ではありませんでしたか。それは私が  
「父」と呼ぶあの空間の休止を支えてくれております。

〔評釈：L 418〕 父と過ごした最後の日の午後のことを描いているが、ここには、

父との間に親密な愛情とともに、親子でありながらも何かしら普通の会話ができず、一緒にいて何やら気詰まりの感じがあるという、謹直すぎるまさに保護者その者然とした父親像が描かれている。

付録：ヒギンソンのディキンソン邸訪問の日程表

1870年	月	火	水	木	金	土	日
8月	15	16	17	18	19	20	21
	ヒギンソン、アマースト到着予定。しかし、到着は1日遅れる。	ヒギンソン到着。Dと面会。その夜、妻に手紙書く。	午後、妻にまた手紙書く。	博物館に行く。アマースト出発。途中、リトルトンより妻に手紙書く。			妹たちに短信を書く。

1870年以降のヒギンソンへの手紙（要点のみ）

[L 476, 1876年10月] コロラド州のジャクソン夫人から、何か書いて欲しいとのことでした。私が適任でないという手紙を私宛に下されば彼女も信じてくれると思います。

[L 593, 79年2月] 家庭を再びお持ちになられたことを思いますに、とても快いことであります。（ヒギンソンの再婚の報に接して）

[L 621, 79年頃] 私の生命を救ってくださった友を、失いたくありません（お便りください）。

[L 622, 79年12月] ジャクソン夫人はあなた様の評価に見合うように飛翔しましたね。あなた様の音曲は救いもしますが、また厳しく呪いも致します。

[L 630, 80年3月] 新聞が書いていることにお悔やみ申し上げます。（ヒギンソンの赤子ルイザの死に臨んで）

- [ L 641, 80年春 ] ルイザの死を悼む詩
- [ L 675, 80年11月 ] 同封の詩4編ご批判願います。
- [ L 676, 80年11月 ] 「慈善」や「子供たち」のため詩を公刊しないかと言われました。ご助言を。
- [ L 728, 81年秋 ] 赤ちゃん (ヒギンソンの新しい赤子 Margaret) にキスを送ります。
- [ L 735, 81年頃 ] 父の死後、母と妹と一緒に住んでおります。兄と義理の姉 (“pseudo Sister”) はお隣の家に住んでおります。地所は広く、私にとってはほとんど徒歩旅行ができるほどの広さです。
- [ L 765, 82年8月 ] 私の最も近い地上の友 (Wadsworth 牧師) が4月に亡くなりました。
- [ L 893, 84年春 ] 亡くなった赤ちゃんのことを思い出しつつ、詩一編。
- [ L 891, 84年春 ] 小さなお嬢様のため、遅ればせのバレンタインの贈物を送ります。
- [ L 972, 85年2月 ] 最近出た George Eliot の伝記を受け取ってください有り難う存じます。
- [ L 1007, 85年8月6日 ] ヘレン・ハントが病気で瀕死との報知見て、驚愕。
- [ L 1043, 86年4月後半 ] ヘレンのためのソネット有り難う存じました。
- [ L 1045, 86年5月初 ] 神は、今も生きていますか。友よ、息をしていますか。

## Selected Bibliography

### Primary Sources

Dickinson, Emily. *The Letters of Emily Dickinson*. Ed. Thomas Johnson and Theodore Ward. Cambridge, Mass.: The Belknap Press of Harvard University Press. 1958.

Dickinson, Emily. *The Poems of Emily Dickinson*. Ed. Thomas Johnson. 3 vols. Cambridge, Mass.: The Belknap Press of Harvard

University Press. 1951.

Secondary Sources

Capps, Jack Lee. *Emily Dickinson's Reading 1836-1886*. Cambridge, Mass.: Harvard University Press. 1966.

Higgins, David. *Portrait of Emily Dickinson: The Poet and Her Prose*. New Brunswick, N.J.: Rutgers University Press, 1967.

Johnson, Thomas. *Emily Dickinson: An Interpretative Biography*. Cambridge: Mass.: Belknap Press of Harvard University Press, 1955.

Leyda, Jay. *The Years and Hours of Emily Dickinson*. 2 vols. New Haven: Yale University Press, 1960.

Sewall, Richard. *The Life of Emily Dickinson*. New York: Farrar, Straus and Giroux, 1980.

St. Armand, Barton Levi. *Emily Dickinson and her Culture: The Soul's Society*. London: Cambridge University Press, 1984.

Todd, Mabel Loomis. *Letters of Emily Dickinson*. New York: Grosset & Dunlap, 1962.

Tuttleton, James. *Thomas Wentworth Higginson*. Boston: Twayne Publishers, 1978.

Wolff, Cynthia Griffin. *Emily Dickinson*. New York: Addison-Wesley Publishing Company, Inc. 1988.

山川瑞明・武田雅子『エミリー・ディキンソンの手紙』東京 弓書房 1988年